



「思い切りたたいても大丈夫?」。列をつくった子どもたちが、確認してガラス目がけてハンマーを振り下ろす。「バンッ」。ランチルームに響く音に、保護者から思わず悲鳴が上がるが、ガラスはわずかにひびが入っただけだ。

八月下旬の夏休み。上之郷小学校は、昨年に続き窓ガラスの飛散を防ぐフィルムの親子体験会を開いた。地震対策で進める校内の窓ガラスにフィルムを貼る工事を利用し

防災の意識を高める

岐阜県御嵩町上之郷小



飛散防止フィルムを貼ったガラスをハンマーでたたき子どもたち＝岐阜県御嵩町の上之郷小で

親子で考える場提供

た催した。

ただ、ことしは「見るだけでなく、児童にガラスをたたかせてほしい」と、特に施工業者に依頼した。真っ先にハンマーを手にした五年の山田直

弥君は「本当だ。飛び散らない」と感心しきり。

父親の満さんが見守る中、山田君は窓ガラスへのフィルム貼りも、霧吹きやワイパーを使ってきれいに仕上げた。「空気が入ると、そこが割れたりして危ないから」と手慣れたものだ。

「学校だけでは子どもは育たない」と、福井俊道校長は登下校訓練や図上訓練など親子で防災を考える場を積極的に提供している。昨年六月には、校区の代

表らに呼び掛け、防災教育推進委員会を設置。ともに防災訓練の計画を練るなど学校と地域の結び付きを強めた。

福井校長は昨年、長谷川清考教頭と町主催の防災アカデミーで学び、防災士の資格も取った。災害となれば、学校が避難所となる可能性もある。防災教育だけでなく、防災時の学校管理のための職員研修なども推進する。

こうした学校の姿勢にPTAも共鳴。昨年会長だった満さんは、各家庭に自助パックの購入を呼び掛けた。帰宅困難などき、一昼夜を学校で過ごすだけの非常食や水などを備えたセット。中身

については各家庭で話し合い、全員がそろえた。

防災意識は家庭でも高まっている。山田君の家では地震や大雨の際の避難場所を話し合ったほか、家族六人分の非常食や水を載せた乳母車を裏口に置いた。「学校の取り組みに背中を押されています」と満さんは話す。

体験会の日。避難経路にあたる一階百二十枚すべての窓ガラスのフィルム貼りを終えた。でも、いろんな災害の場面を学んできた三年の瀬瀬神偉君は首を横に振る。

「フィルムは地震のときだけ。災害には大雨とか火事とかもあるから、まだ安全とは言えないよ」

(土屋晴康)